

大学野球と高校野球のコーチングスタイルの差異

上田 隆治 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 渋谷 俊浩

キーワード：大学野球 高校野球 コーチングスタイル 自主性

1. 緒言

近年、スポーツ現場において体罰を初め、様々な事件・問題行動が起きている中で、著者は指導者がコーチングを実施するにあたって、どのようなコーチングスタイルを用いることが指導対象（選手・アスリート・生徒等）にとって適切なのかということに関心を持った。

竹本（2009）は「コーチの資格を取得し職業として行う（中略）・選手の延長としてコーチになる（中略）、後者においてはトップアスリートからコーチになる（中略）・学生が母校でコーチとして指導するなど様々なコーチが存在する.」と、また南川（2008）は「日々のトレーニング指導において、トレーニング指導者は、トレーニングの目標の達成や、競技パフォーマンスの向上に貢献するために、日々の時間的制限の中で、最大限の効果や効率を目指してトレーニングを展開していこうと努力しますが、実際の指導現場では、そう簡単にいかないのが現実である.」と指摘している。

そこで本研究は、高校野球から大学野球へと環境が変わる中で、コーチングスタイルの差異に検討を加えることで、本学硬式野球部の競技力向上に貢献することを目的とする。

2. 研究方法

対象：びわこ成蹊スポーツ大学 硬式野球部

方法：アンケート調査を実施した。用紙を112部配布, 74部を回収, 回収率は70%であった。

3. 結果と考察

仮説では、大学野球においては部員が自主的

に取り組み、指導者・主将・学生コーチらスタッフと連携して活動していると考えていたが、本学硬式野球部は指導者が主体となっていることが明らかになった。

しかしながら、主要な結果として、コーチとコミュニケーションがとれているかについて回答させたところ、高校時はとれている部員が多く、現在とはとれていない部員が多かったことに加え、現在（大学時）どのコーチングスタイルが競技力向上に適しているかを回答させたところ、70人中42人が協力型と回答した。

これらのことから、大学野球においては部員個々が自身の活動内容を十分理解し、自主的に（選手主体で）、スタッフと連携しながら取り組むことが重要であることが推察された。

4. まとめ

本学硬式野球部の競技力を向上させるためには、適切なコーチングスタイルは協力型で、部員と監督・コーチが十分なコミュニケーションをとっていくことが重要であると推察された。

引用・参考文献

南川哲人（2008）自分を知り、学んでいくためにー評価段階におけるデータ収集の重要性. トレーニングジャーナル. ブックハウス HD, 341 : pp. 74-81

竹本淳子（2009）スポーツにおけるコーチングスキル向上を目指した 支援ツールの作成. 慶應義塾大学 環境情報学部 東海林研究会 卒業研究, pp. 4-5